

# アメリカにおける創造的 舞踊教育の成立過程 — JOHPER 誌 (1930年代) を中心にして —

○田名部靖子  
片岡康子

## ＜研究目的＞

1930年代は、アメリカにおいて新体育思想とモダンダンスの影響を受けながら、実践的に蓄積され始めていた創造的舞踊教育が、確実な進展を遂げた時代であった。<sup>註1)</sup>本研究では、アメリカの体育専門誌であるJOHPER (1930年創刊)が、舞踊教育分野に提供した記事から、アメリカにおける創造的舞踊教育の成立過程を、特に1930年代に絞って検討を試みる。

## ＜研究方法＞

JOHPER 誌, 1930～1970年に掲載された舞踊関係記事を全て抽出し、以下の手順で考察した。

- (1)年代順にタイトル一覧表を作成 (発表資料参照)
- (2)各記事を領域別に分類 (図表 I 参照)

領域 I : クリエイティブ・ダンス, モダン・ダンス系 (C・MD)

領域 II : フォーク・ダンス, ソーシャル・ダンス

系 (F・SD)

領域 III : クロック・ダンス, タップ・ダンス系 (CL・TD)

(ほかVリズム・音楽系, Vその他)

(3)10年ごとにまとめ、各領域の全体に占める割合の時代的変遷 (図表 II), 更に主領域 I については領域内で①理論, ②指導法, ③解説に細分し、内容別変遷を数量化 (発表資料 P 4 参照)

(4)1930年代については、1年ごとの領域別推移を数量化 (発表資料 P 6 参照)

(5)1930年代の主要な記事を各々要約して読み取り、時代的特色を検討。

## ＜結果及び考察＞

### 1. JOHPER 誌舞踊関係記事の数量的推移

40年間から抽出された総記事数は 349 件、領域別に分類した素表 (図表 I = 30年代のみ) をもとに、総記事数と領域別変遷を数量化したものが図表 II である。

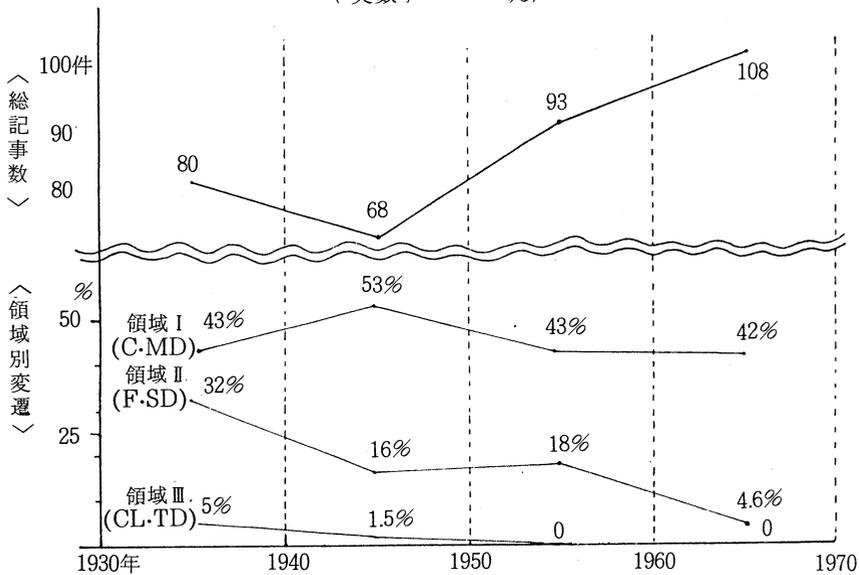
JOHPER 誌の前身, APER 誌<sup>註2)</sup> (1924～29年) では、舞踊関係記事が皆無であったのに対し、1930年代に入って増加傾向がみられる。“The Research Quarterly” 誌 (1930～1968年) から同様の傾向が考察され、特に1930年代の論文数の多さが特徴的である。<sup>註3)</sup>

以下、このように活発な様相を示す1930年代の記事を詳細に検討し、時代的特色を考察する。

図表 I 〔1930年代 領域別記事数〕

	領域 I クリエイティブダンス系 モダンダンス系 (C・MD)				領域 II フォークダンス系 ソーシャルダンス系 (F・SD)				領域 III タックルダンス系 CL・TD	リズム 音楽系	その他	総計
	理論	指導法	解説	小計	理論	指導法	解説	小計				
1930	0	1	0	1	1	1	5	7	0	0	0	8
31	0	1	0	1	0	0	2	2	2	1	0	6
32	5	0	0	5	0	0	0	0	0	2	0	7
33	1	2	1	4	2	1	1	4	0	0	2	10
34	2	0	0	2	0	0	1	1	1	0	0	4
35	0	2	1	3	0	0	0	0	0	2	3	8
36	2	0	2	4	0	1	0	1	0	0	2	7
37	2	0	1	3	0	0	1	1	1	1	0	6
38	3	0	1	4	0	2	2	4	0	2	0	10
39	4	2	1	7	2	1	3	6	0	0	1	14
計	19	8	7	34	5	6	15	26	4	8	8	80
%	56% 43%	22% 43%	21% 43%	43%	19% 32%	23% 32%	58% 32%	32%	5%	10%	10%	100%

図表Ⅱ 〔舞踊関係記事 — 総記事数と領域別変遷〕  
(実数) (%)



## Ⅱ 主要記事概要

(1)1930年代前期 (1930~1934年) ……1932年, ルース・セント・デニスは, “ダンスは有機的統合としての生命文化へ導く教育手段となるべき” とダンス独特の価値に論及, ハンヤ・ホルムは「マリー・ヴィグマンの教育原理」と題し, モダンダンスの教育への応用を論じ, マーガレット・ドゥブラーは“律動的身体スキルが身心統合をもたらす創造的精神を養う”と説くなど, ダンスの教育的価値に言及する記事が目立った。1933年には, ルイス・デッカーの“ダンスは経験の再創造である”という論や, ドリス・ハンフリー, テッド・ショーンの記事, 1934年は, C・フィリップイの“ナチュラル・ダンスの目的は, 創造性や心身の協応である,”とする記事に重要な主張が見られる。

ここに共通して論じられている内容は, 舞踊の精神, 情緒, 身体の統合をもたらす可能性と創造性についてであると言える。

(2)1930年代後期 (1935~1939年) ……1935年, 「クリエイティブ・ダンス」という語が初めてタイトルに用いられ, 1936年, G, W, バイスワンガーは, “体育的創造活動としてのモダンダンスの, 教育的, 芸術的目標に留意した計画化”を説き, M. J. シェリーは, “芸術教育と体育は, 意図的に承認された時共存し得る”と定義, 1937年, E. C. ハウは, “舞踊教育は体育よりも芸術の側へ向かう傾向にある”としている。1938年, E. ダンケルの「ダンスを正しく位置付けよ」, 1939年, L. カリフの「教育的なダンス」, F. R. ロジャース「芸術, 教育としてのダンス」等では, 舞踊の芸術的な価値を述べ, それ故, 学校教育で効果的に

利用を — と, 指導法や計画化を問題としている。

これらに共通する内容は, 芸術としての舞踊の本質を明確化し, 芸術か体育かという, 教科上の位置付け論を展開していることと言える。

## Ⅲ 考察

従来, フォーク・ダンスやソーシャル・ダンス, クロック・ダンス, タップ・ダンスといった伝統的舞踊の教育が主流だった現場の指導計画の中に, クリエイティブ・ダンスやモダン・ダンスが普及して, 創造的舞踊教育が成立する過程は, 1930年代前期にまず価値付け論が説かれ, 教育的正当性が主張され, 後期, 舞踊の芸術的側面を統合する計画・方法が論議され, 実践指導されるという段階を経ていったことが明らかである。

更に, 1930年代を通じ, 全人教育に立脚する新体育思想の理念や目的は, すべての論文の根本的原理になっており, 創造的舞踊教育の成立過程における, 新体育論の影響の大きさが考察できる。

- 註(1) Richard Kraus and Sarah Chapman, “History of the Dance in Art and Education.” 2nd ed., 1981, P.P. 117-120  
片岡康子「アメリカにおける創造的舞踊教育の成立過程 — G. コルビーとB. ラーソンを中心として —」お茶の水女子大学人文科学紀要 第36巻 (昭和58年3月)を参照。
- (2) APER誌はAmerican Physical Education Reviewの略称であり, 1895~1929年まで発刊された。
- (3) 有馬順子「米国Research Quarterly誌にみるダンス研究報告の文献的研究」東京学芸大学 昭和43年度卒業論文